

象と暮らして

森水 陽一郎

定期検診からの帰り道、妻が手乗り象を一頭買ってきた。

手乗りといっても、実際にはチワワほどの大きさで、ニキロ近くある。

「遺伝子組み替え固定種、環境いかんによっては、繁殖可能」というふれこみだが、たいていひと月足らずのうち息を引き取ってしまう。へそでも曲げたように、かたくなに餌を受けつけない。

鳴き声は、象らしいパオーンではなく、「チュミーン」と聞こえる。ネズミを間違って踏んづけてしまったような、どちらかというと耳ざわりな響きだ。

餌を与えてもなだめすかしても、鳴きたいときは一晩中鳴いている。鳴くのも仕事であると、あらかじめ購入者に伝えられているが、早々に嫌気がさして、返品されることもあると聞く。一時期に比べてずいぶんと落ち着いてはいるが、それでも中古の軽自動車ほどの値がついている。

たったひと月足らずの命に、それほどの出費は馬鹿げていると誰もが考える。しかし子宝成就の神社に見放され、いくたびもの体外受精ではねつけられた夫婦にとっては、最後の頼みの綱として、手乗り象に願いが託される。

キャリアケースの中からじっとこちらを見上げる姿は、お世辞にも可愛らしいとは言えない。ピンクがかったまだら模様で、耳の先が悪魔的に尖っている。まつ毛がほとんどなく、鼻にはいぼ状の突起が無数に並んでいる。

黄ばんだひよる長い牙が二本、口元から伸びているが、その多くは歯科医院で使われるコンポジットレジンだ。実際の象牙はあらかじめ根元から落とされ、婦人病に万能である漢方として、高値で取引されている。

両脇に手を差し入れ、壊れものでも扱うように妻がそっと抱き上げると、手乗り象はとくに暴れることもなく、短く「チュミーン」と鳴き、鼻を伸ばして妻の手をくすぐる。そして洗礼のご挨拶とばかりに長々と尿をする。

慣れるのがあまりにも早すぎる気もするが、もしかすると時間の進み方が、僕たちとは違うのかもしれない。

食事は動物園の象を参考に、干し草や果物、野菜、草食動物用のペレット、ビタミン剤、あとは庭に茂っている柔らかな雑草を、ローテーションを組んで分け与えた。

飲み水は、タンクのついた自動給水器とボウルを並べ、太い針金で固定し、鼻のいたずらにそなえた。しかしそれらは、実際に手乗り象と生活を始めることで、あきらめと受け入れの日々を余儀なくされた。

ある程度の覚悟はしていたものの、無限に続く水遊びを初日から覚え、フローリングの床が水びたしになった。むっとくる匂いに空気清浄機が白旗をあげ、何を食べても真夏の動物園の味がしっかりと割り込んできた。

野外で飼うのは簡単だが、それでは手乗り象の恩恵は受けられない。

一つ屋根の下、その命が尽きるまでもに暮らすことではじめて、コウノトリかダンボか定かでない何者かが、赤ん坊を届けに来てくれる。残念ながらも多くの場合、届け先を見失ってしまうらしいが。

妻が仕事に出ているあいだ、僕は三つの画面に映し出された為替チャートと睨めっこをし、終わりのないゼロサムゲームに奮闘している。

元手は微々たる額だ。高い倍率のレバレッジを利かせて運よく売り抜けたのが五年前、小さな火傷なら両手に余るほどあるが、横浜のはずれに建つ中古の一軒家を、二十年ローンで買えるぐらいの儲けは出ている。

たしかに胃腸薬が手放せないし、ショートスリーパーの生活を余儀なくされている。慢性的な腰痛もあるし、新婚当時に比べたら枕を交わす回数もシロサイのごとく激減した。おまけにオスとしての機能が弱く、運よく泳ぎ切った精鋭たちも、抗精子抗体とやらの門番に、ことごとく撥ね返されている。

高額なタンポポ茶を飲んだり、真夏でも腹巻を巻いたり、妻も卵胞の発育不全を補うためにあれこれ試してはいるが、結局は手乗り象に行き着いた。

三十八歳の初産が、いったいどれほどのリスクを伴うことになるのか、もちろん個人差が大きく、医師も明言を避けている。しかし年を追うごとに着床までの扉がせめられることはたしかだろう。

水びたしになった床をタオルで拭きながら、僕は自分自身に問いかける。手

乗り象一頭でさえ手を焼いている人間に、たとえば染色体や心臓の、先天性のむずかしい病を受け入れることが、本当にできるのだろうか。

妻は毎朝八時すぎに家を出て、大倉山駅から東横線に乗って、自由が丘に向かう。文庫本の短編が、ちょうど一つ読めるほどの距離だ。

そこで長年の夢だった東南アジアの家具をメインにした雑貨店を経営しているが、年を追うごとに売り上げは落ちてきている。決して安くない家賃に、二人の従業員、現地への買いつけと、二年に一度の更新料、インターネットの評価数も、いまだに二桁に届いていない。

彼女自身の情熱も、現実を知るにつれてタネ火の火力にまで戻っているように見える。普段と変わりなく出かけたはずなのに、改札口の手前で引き返してきたり、買いつけの間隔も、年を重ねるごとにあいてきている。

かと思えば、ボーナスを大盤振る舞いしたり、慰安旅行としてビジネスクラスでバりに連れて行ったりしている。燃え尽きる前のロウソクに見られる、最後のひと花とばかりに。

手乗り象にしてもそうだ。何の相談もなしに衝動買いし、一度は販売店に引き取ってもらった。

その後あらためて、ひぎを突き合わせて話し合い、顔をくもらせる結果がはじき出された病院からの帰り道、ようやく手乗り象は正式に、我が家の一員になったのだった。

ともに暮らし始めてしばらくのあいだは、飼育指南書のとおり、家から出すことなくリビングを自由に使わせた。コード類を片付け、壁にベニア板を立てかけ、ケージのまわりには青いビニールシートを敷いて、やんちゃ坊主の噴水をなんとかやりすごした。

「ねえ、外に出たがってない？」

はき出し窓からじっと庭をうかがう手乗り象を見て、妻が言った。刈られたばかりの芝生はまぶしいほどに青々として、それは手乗り象が知るはずもないアフリカの平原を思わせる。

「実は一度、歩かせたことがあるんだ」と僕はテーブルごしに言った。

妻は顔色一つかえなかった。手乗り象の効果を、霧散させてしまう行為であるにもかかわらず。

「ほしくないの？ 赤ちゃん」と妻。

僕はぬるくなったコーヒーに口をつけ、沈黙をもってそれに応えた。

もちろん僕も、子供はほしかった。妻の願いを叶えたかった。ただ、何かの犠牲の上に成り立つ命について考えたとき、未来をまっすぐに見据えることのできない自分がそこにいたのもたしかだった。

妻がレモネードのグラスをかたむけて、テーブルの上に小さな水たまりを作った。

「一度外に出したら、もう戻らないって、指南書に書いてあった」

「名前、つけないか」と僕は受け流して言った。「つけたら情がわくから、お別れのとき悲しくなるから、やめたほうがいい、そう書いてあったけど、むしろきちんと悲しむべきじゃないか、その死を悼むべきじゃないかって」

「わたしは毎月、悼んでるよ。あなたが知らないだけで」

思わぬ言葉に、僕は時計を止めた。その秒針は、僕の知らない心臓の裏あたりをチクチク刺していた。

手乗り象は鼻をもたげて、窓ガラスの匂いを熱心にかいでいる。あと半月もすれば、痩せおとろえて寝たきりになり、末期の水さえも拒絶する。

妻が椅子を離れ、はき出し窓に向かった。錠をとき、背後からそっと手乗り象を抱え上げ、窓を横すべりさせてはだしのまま外に出ていく。

喜びか、とまどいか、かすかに「チュミーン」という鳴き声が聞こえる。芝生にそっと下ろされる手乗り象、その船出を祝福でもするように、モンシロチョウのつがいが光のきらめきを産み落として横切っていく。

視界から消えた妻が、ホースリールをこする音をさせてすぐ、芝生の上にもコールが降り注ぎ、ささやかな虹が生まれた。手乗り象はバンザイでもするように鼻を高々ともたげて、背負わされたその任から離れようとしている。

遠くない将来、僕たちは約束された死を見届けることになるだろう。それまでに彼の名前を決められるだろうか。つかの間の都合のいい供物ではなく、温かな血の通う我が子として受け入れることができるだろうか。

妻の雑貨店も、僕の為替取引も、まだしばらく危うい綱渡りが続くだろう。

もしかすると僕は、落ちたがっているのかもしれない。大地に足をつけた実直な象として、ひたいに汗を流したいのかもしれない。ディスプレイを睨みつけての、胃痛をとまなう冷や汗ではなく。

手乗り象を見送るまでに、僕たちにできることはあるだろうか。

たとえば家じゅうの窓を開け放ち、読みかけの本を枕に、手をつないで眠るのはどうだろう。平原を吹き渡る風の音に、ただ耳を澄まして。